



TITLE:

北米東部インディアン研究の到達点とエンゲルス『起源』（2）

AUTHOR(S):

大西, 広

CITATION:

大西, 広. 北米東部インディアン研究の到達点とエンゲルス『起源』
（2）. 経済論叢 2003, 172(5-6): 1-13

ISSUE DATE:

2003-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/45597>

RIGHT:

北米東部インディアン研究の到達点と エンゲルス『起源』（2）

大 西 広

V 国家の衰退原因とその含意

イロクォイ様式およびアルゴンキアン様式の位置

前稿ではインディアンの国家建設を少なくともウットランド様式期にまでは遡ることができたが、そうだとすればするほど、モルガンやエンゲルスが「国家成立以前」としたイロクォイ族などの社会の問題が浮上する。そして、実際に Thomas [2000] が解説するイロクォイ様式に関する考古学的研究の到達点においてもこの社会での階級の存在はあいまいであり、かつ戦争で殺害した敵を食べたと想像されるカニバリズムの形跡など奴隷制成立以前の社会の特徴を見ることができる。こうした人骨は首飾りや戦勝記念品などとして加工・利用されたとされている。

しかし、こうした特徴とともにモルガンやエンゲルスが言う以上に階級社会的な特徴を持っていたことも事実である。Thomas [2000] によると、村の首長は他の指導者や平民より大きな家に多くの飾り物をつけて住んでいたとされている。筆者は大西 [2001a] で言及したように北ボルネオ・イバン族の「原始共同体社会」を観察した経験を持つが、イロクォイ族と同じくロングハウスに住む彼らの首長は住む場所さえロングハウスの中心ではあったが、他の村落構成員とまったく同じ大きさの部屋に住んでいた。この意味でイロクォイ族は少なくともイバン族よりは「階級社会」的である。また、「支配（rule）」したとは表現されないものの、公共事業の先導や部族内の不和の

調整および宗教行事のモニターにあったとされる彼らの役割はコミュニティの団結が生産力的にも重要であった時代における「国家」としての役割¹⁾であったと言うこともできる。つまり、生産力の維持・発展のためには彼らの社会に対する指導力をこの社会が保障する必要があったのであって、このためには彼らの「指導」が「支配」であることを妨げない。これは現代の「民主主義権力」が如何に制度的民主主義を整えようとも「国家」であることを停止しないのと同じである。宗教指導者としての卑弥呼もまた魏志倭人伝によると「魏王」であった。これはより本質的な国家の定義と関わるので別稿にて詳しく展開したい。

また、関連して補足しておきたいのは Thomas [2000] によるイロクオイ族の母系・母権制の説明についてである。そこでは、半農半猟社会では長期に渡って男性が狩りに出るから村に残って農業をする母親が一家の主権を握らざるを得なかった、また農産物の備蓄が彼女らの家でなされるため資産は女系で相続されることになったと、母権制と母系制の由来が説明されている。筆者としてはこの方が産業間分業を基礎とした男女間の力関係の説明としてエンゲルスより唯物論的だと考える²⁾。農業・狩猟の男女間分業と母系制については次に見るアグロンキアンもまったく同じである。なお、Thomas [2000] はこの分業の結果、農業がより主要な産業となるにしたがって女性の地位が高まる傾向にあったため、男が好戦的になって自分たちの社会的地位を保持しようとしたとの J. ウィットホフトと B. トリガーの見解を紹介している。現代の産軍複合体が自身の利益のために好戦的となることに等しく興味深い。が、それ以上

1) Thomas [2000] は太陽神への生贄として男性の戦争捕虜が殺されたとしている。これはコミュニティの団結という生産力的要請に対する宗教の役割と理解することができる。

2) より原理的に言えば、エンゲルス理論が通常の生活活動と生命の再生産活動を両立にして歴史理論の構築を述べたのに対し、筆者は通常の生産活動（生産様式）の変遷の従属変数として男女関係の変化を捉えるべきであると考えている。たとえば、戦後日本社会における女性の地位の低さは年功序列システムを基礎とする男子労働者の基幹労働者化の結果として理解するとの立場である。この点は、大西 [2001b] 参照。なお、この視角は民族問題をも産業間ないし階級間矛盾として捉えるべきとの立場と相関している。これは、前掲大西 [2001a] の基本的主張点である。

に本稿の目的にとって重要なのは、農業の発展が女性の地位向上に作用していたことであり、これは社会の発展にともなって女性の地位が低下したとするエンゲルス理論の反証となる。

ただし、彼らの好戦性の説明はもうひとつあって、それは旱魃による部族間の土地争奪の激化である。これは次に述べるプレーン・ビレッジ様式の衰退期と同じ現象であるが、ともあれ大局的には鋤や灌漑をまだ知らなかった彼らの農業技術の未発達の結果とも理解できる。ミシシッピ流域のように温暖かつ多湿ではない地域において「農業社会」を十分確立するだけの条件を欠いた彼らが安定した「国家」を成立しえなかったことの原因はこの意味でやはり当時の技術と産業一要するに生産力の制限にあった。この制限の下での自然条件の悪化や外部からの侵略は一気に戦争を常態化させ、よって文明自体の解体を促進することになったのである。

なお、以上のイロクォイ様式と並び称されるアルゴンキアン様式もその基本はイロクォイ様式とほぼ同じである。違いと言えば、① 狩猟への依存がより強かったこと、② イロクォイ風のロングハウスは公共用途のもの以外は作られなかったことくらいで、その他、③ 樺の木皮の容器やソリなどへの利用³⁾や、④ 首長の一婦多妻制、⑤ 国家連合への貢納制⁴⁾などはアルゴンキアン内の部族によって異なる特徴づけのように見られる。

プレーン・ビレッジ様式における国家の衰退

こうしてミシシッピ様式という農業文明の北東方面には気候・風土の相違から狩猟依存度の高い社会が取り残された一方で、その北西方面にも気候・風土の相違からやはり狩猟への依存度の高い社会が成立している。プレーン地方に成立した「プレーン・ビレッジ様式」がそれであるが、ここで問題としている国家や階級の存在はイロクォイ様式やアルゴンキアン様式以上に不明確である。

3) これは五大湖周辺地域に住んだオタワ (Ottawa) 族やオジワ (Ojibwa) 族などの特徴である。

4) ④⑤ はバージニア州周辺に住んだドグ (Doeg) 族などの特徴である。

Coe, Snow & Benson [1986]によるとこの地域でも現在の南北ダコタ両州やカナダのマニトバ州南部ではウッドランド期に円錐形や細長い形をした墳墓が築造されているから、この地も以前には明確に階級と国家が存在したが、このプレーン・ビレッジ期にはそれらが消滅し、酋長の権力もより弱体化している。筆者が読み漁った限りの文献ではこの原因は不明確であるが、それでも多少の推測はすることができる。

たとえば、Thomas [2000]はこの様式の姿を紀元1100年頃に入植が開始され1300-1800年頃に繁栄したノースダコタ州中部＝ナイフリバー河畔の三つの遺跡（「ビッグ・ヒダサ（Big Hidatsa）遺跡」「サカカウェア（Sakakawea）遺跡」および「ロウアー・ヒダサ（Lower Hidatsa）遺跡」）を例に次のように描いている。それによると、基本的な産業はカボチャ、豆、トウモロコシ、ヒマワリの農業ではあるが、バイソンの狩猟も重要な柱をなした。文献により農業が基本との表現もあるが、鋤が発明されていない下ではバイソンの狩猟などを伴わないわけには行かず、やはりその点で狩猟社会としての性格が色濃く残ったともされている⁵⁾。やはりこの点がミシシッピ様式との基本的な相違である。また東西交易の仲介者として近くで採れる火打石やワイオミングの黒曜石、五大湖の銅、メキシコ湾や太平洋岸の貝殻を取引きしたともされるが、これもまたユーラシア大陸におけるシルクロードの民が遊牧民であったように、彼らの移動性の高さと結びつけて理解することもできる。家屋は土で作られたとされるが、防御上の必要から柵を張り巡らせた高台の上に住む⁶⁾彼らも冬季には高台の下に移動するということであるからやはり「半定住」であった⁷⁾。ただし、この遺跡には最盛期に4000-5500人の人口があったとされている。

また、このことと関わって、Coe, Snow & Benson [1986]は重要な三つの

5) Snow [1976] p. 89 の解説による。この解説ではこのために彼らはバイソンが住まないミズーリ川東岸を居留地とはせず、バイソン猟が可能な西岸を居留地に選択したとされている。

6) 日本でも、「倭国の大乱」期と室町時代には争乱の影響で集落が「高地性集落」となった。この類似性も興味深い。森 [1983] 参照。

7) Waldman [2000] はさらにひとつの「集落」が宗教行事とバイソン猟をする夏季以外には通常別々に暮らしたとし、より移動的な生活をしていたと主張している。

情報を付け加えてくれている。それは、① この地域には農業に適した肥沃な沖積世の土地が少なかったこと、② 13世紀における旱魃はさらにその状況を厳しくし各部族が適地を求めて移動したこと（Snow [1976] は同趣旨から1470-1510年頃の旱魃を重視している）、③ 16世紀には西洋社会から導入された馬がバイソンの狩猟をより生産的にして多くの部族が農業を放棄したこと、④ そもそもこの地でウッドランド様式を支えた部族とプレーン・ビレッジ様式を支えた部族が異なることである。① の本来的な自然条件がそもそも「防衛」を要する戦時対応型の社会を要請したこと⁸⁾に加えて②③ の歴史的事件が一層この社会を前農業社会的なものに引き戻したことが推測される。また、④ の点も、より農業に依存していたウッドランド様式の民がバイソンの狩猟で戦争の腕を磨いていたプレーン・ビレッジ様式の民に駆逐されたと見ることができ⁹⁾。これは中国史からの連想で言うと、中心地（ミシシッピ流域）の農業文化の弱体化の過程で北方の遊牧民族が南下をしたのだと言える。やはり東洋史との接点は多い。

ミシシッピ様式ナッチェス族における国家の衰退？

以上は高度の階級国家を成立させていたミシシッピ様式と同時期にも明確な階級社会を形成できなかった諸部族の例であるが、他方では高度の階級国家を持ったミシシッピ様式自体もその「国家」を多くの西洋人に印象づけるものではなかった。この経過もまた「国家」の歴史的條件理解にとって重要であるので、いくつか検討してみたい。そのひとつの例は、時に四つに分類されるミシ

8) Snow [1976] p. 90 はさらに明確に「戦争が今やこの地域の生活の一部となった」と述べている。

9) Coe, Snow & Benson [1986] によるとウッドランド様式を支えた部族はダコタ (Dakota)、アシニボイン (Assiniboin)、シャイアン (Cheyenne) で、後のプレーン・ビレッジ様式を支えた部族はパウニー (Pawnee)、アリカラ (Arikara)、マンダン (Mandan)、ヒダサ (Hidatsa) であるが、前者中のダコタ、アシニボイン、後者中のマンダン、ヒダサがシオウアン語族として共通する以外は語族としても異なっている。ただし、こうした異文化の混在は後に異なる語族間の生活様式の種差を解消する「コールセント様式 (Coalescent Tradition)」と呼ばれる新たな独自文化を形成した。この点は、Snow [1976] p. 90参照。

シップ様式のうち「プラケミン・ミシシピアン」と呼ばれるミシシッピ下流域の文化で最も「国家」的な統治機構を持っていたナッチェス族の場合である。ここではモルガンがイロクォイ族について行ったと同様の観察記録がフランス人ド・プラッツを始めとする多くの探検家たちによって17世紀末から出されており、それが非常に重要な手がかりを与えてくれているからである。実際、筆者もこの遺跡への訪問時にいくつかの興味ある資料を入手することができた。

そこでまず、この社会がどの程度に階級社会的であったかという問題であるが、イロクォイ族やアルゴンキアンと同様、ここでも異なる評価が存在する。たとえば、ド・プラッツの記録に依拠した Barnett [1998] は一方で、マウンドの建設、指導者層の死に際する殉死などが「物理的権力」によるものではなく宗教を母体とした彼らへの尊敬によるものとして一般の王権との違いを強調しているが、他方では貴族階層を含むこの社会の階層構造が「階級制」に近いことを認め、首長を 'like a crown' と評価している。「母系制」には違いないものの、そのルールにそって首長が世襲されていることにも違いがない。先にも述べたように、少なくともマルクス主義では宗教を国家権力の安定装置として理解している。人々が時に自発的に殉死をするからといって、これを権力ではないと評価することはできない¹⁰⁾。

さらに、Swanton [1998] が紹介する他の多くの観察記録はそれ以上に「国家」や「階級社会」を認めるものとなっている。たとえば、Penicaut はナッチェスの首長は他の8つの村を支配 (command) したのであって、貢納を命令する権力を持ち、「絶対的に王である」と記している。人々はこの「王」の4歩以内には近づけず、「王」は特別に大きな家に住み、多くの召使いを持っていた。Charlevoix や Le Petit もこの権力の性格を「専制的」と記している。なお、補足をするならば、この遺跡にある博物館には当時ここには8ヶ所の奴

10) Maxwell [1978] pp. 72-73 は、首長の母の死に際してその父が首長(つまりその子)によって殺され、母とともに埋葬される儀式を図によって示している。「母系制」の何たるかを示していると同時に、殉死が「物理的強制」によるものでないことを示している。

隷市場があったとの解説があった。「奴隷制」が存在したのである。

こうしてナッチェス族の当時の状況を全体的に捉えと、母系制や権力の宗教性、平民たちの自発的服従などの「前奴隷制」的特徴を持ちつつも、イロクォイ族などよりはずっと階級的な社会を形成していた事がわかる。Swanton [1998] p. 40の表によると18世紀初頭には戦士のみで4000人を数えたというから、やはり十分に「国家」であった。1729年に始まるフランス人との武力紛争さえなければ、その後も「国家」として存在しえた可能性は現実にあった。

がしかし、17世紀以来の西洋人との接触の歴史を振り返ってみるとき、西洋人がただ軍事的に強力であったというに止まらない「敗北の原因」を探ることができる。というのは、まず第1に、ナッチェス族の軍事的敗北の背景には隣りのチェロキー族が西洋人と連合して攻撃をして来たと言う事、言い換えればインディアンたちが統一した国家を形成しえていなかったという事情があるからであり、さらに第2に、こうした軍事的衝突以前に西洋社会との接触がインディアン社会の秩序を蝕んでいたという事情があるからである。Swanton [1998] p. 103が紹介する Le Petit の叙述によると、平民たちの「王」への盲目的服従を利用して、王は西洋人の求める狩猟人やカヌーの漕ぎ手を奴隷として売り渡すというようなことを行っていたという。こうした行為が繰り返される時、「王」の尊厳は徐々に失われざるを得ず、よって国家の凝集力は弱まったであろう。ナッチェス族インディアンはこのようなして自分で自分の首を締めたのである。

が、こうした「王の誤り」も歴史の高みから見た時、単なる「誤り」というより、一種ひとつの「必然」と見るべき事柄のように思われる。というのは、巨大な生産力を持つ別種の社会と接触した際に、一人の奴隷が一生かけても生産なしえない財の獲得のために一人の奴隷を差し出すという行為は「経済学」的な意味で合理的なのであって、その意味では一種の「必然」であるからである。つまり、大局的には、当時のインディアン社会と西洋社会との巨大な生産力の違いが旧社会としてのインディアン社会を解体したのである。まことに悲

劇ではあるが、新しい生産様式による古い生産様式の駆逐が西洋人によるインディアンへの征服という形を採らざるを得なかったのはこのためである。

ミシシッピ様式マウンドピラ遺跡における国家の衰退

ところで、このナッチェス族地域からそう遠くないアラバマ州マウンドヴィラ遺跡については、ナッチェス族のさらに1歩手前に国家衰退の歴史を経験している。前述のようにカホキアから少し遅れる紀元1050-1500年頃に栄えたこの地も15世紀末には人口が減少し、16世紀には小さな村々として各地に人口が分散、ついに16世紀末には消滅に至っているからである。Thomas [2000] はこの事情とこうした衰退の原因についての諸説を紹介しており、これもまた我々の研究目的にとって大変興味深いものとなっている。

それによるとこの多くの説明は西洋人とのコンタクトを原因とするものである。つまり、一方ではこの文化の消滅が1540年の Hernando de Soto の来訪の後であるため、外来品の流入、新しい商業ネットワークへの組み込みなどといった内的外的な社会の再編成が衰退をもたらし、他方では西洋人の軍事的侵略と病原体の持ち込みを直接の原因として挙げるものが多く、これらは先のナッチェス族の場合と同様それ自体重要な指摘と思われる。インディアンたちは国家を持たなかったのではなく、持っていたものの西洋人のために崩壊させられただけという理解になるからである。

ただし、とはいってもこの説にのみ我々が十分満足してならないのは、上記のようにマウンドヴィラの人口減少は Soto の来訪以前からのものだからであり、たとえこの衰退が西洋人の影響によるものであったとしても、後述のカホキアなどインディアンの同種の国家が長続きせず、次々と消えていったことの説明が求められるからである。したがって、再び Thomas [2000] にしたがってそれら以外の衰退原因説に注目すると、そこにはやはりこの土地での農業生産力に関わる問題が浮上してくる。すなわち、この人口を維持するための食糧生産で周辺の上地の土壌が悪化し、農業生産力が低下したという指摘である。

この点で興味深いのは、Coe, Snow & Benson [1986] が主張するこの地域における戦争の頻発理由である。彼らによると、ここでの戦争は農業生産を可能にする限りある沖積世の土地をめぐるものであって、これはメキシコやプエブロなどと違って灌漑・排水技術を持たなかった彼らにとって必須のものであったと思われる。あるいは、より本質的に「農業社会」ではあっても、その農業を安定的に維持する技術を持たなかったことの反映といえよう。鉄製農具を持たなかったことで深耕をできなかったことももうひとつの原因として挙げられるかもしれない。ともかく、「国家」成立の前提条件としての農業の発展の不安定さが「国家」の不安定さをも帰結していた。それがここでの結論である。

ミシシッピ様式カホキア遺跡における国家の衰退

もうひとつ、こうした国家衰退の原因についてはカホキア文化の衰退についても多くの詳細な研究があり我々の研究にとっても重要である。Young & Fowler [2000] によると、それは次の三つの説として提起されている。

まず第1のものは、Woods (Lopinot & Woods [1993]) の説で、炊飯用の木が15マイル四方から枯渇し、遠方からの運搬も末期には相当困難となったことを原因とするものである。これはカホキアの居住人口が1日に必要とする薪の量を計算し、それを供給する森林の範囲が次々と遠方化したことを数量的に計算、かつ実際にもカホキア後期の地層からは遠方にしか生えていない材木の痕を発掘してその信憑性を高めている。さらに言うと、カホキア文化の消滅以降、逆にこの地域一帯が無人の地と化したこと¹¹⁾ともこの「森林の消滅」論は斉合的であり、そのためにより大きな説得力を持っている。

また第2の説は Ollendorf (Dalan & Ollendorf [1991]) のもので、森林伐採の結果としての洪水と表土の流出が農業生産力を減退させ、居住地としてのカホキアの魅力を消失させたとしている。実際、カホキア後期には住居がより

11) Pauketat & Emerson [1997] p. 25 の地図がそのことを如実に示している。

高い地面へと移動した形跡が見られ、また内陸の台地への移住も確認されている。この時期には私的な貯蔵庫の激増や共同墓地の分散化・小型化によって個人やコミュニティの権力の分散＝国家の衰退が見られている。

さらに第3の説は、Pauketat や Emerson (Pauketat & Emerson [1997]) のもので、支配者たちが宗教に偏した統治を行い、政治的な制度設計を怠ったことに原因を求めている。カホキアの凝集力が宗教的なものに偏していたことは既に述べたが、この後期（モアヘッド期と呼ばれる）にはカホキア「都市」の中心部が高い柵で囲まれるようになったり、打ち首にされた人々の骨が発見されたりといった社会の不安定化としてこの弱点が露呈し出したという理解である。ちなみに、「倭国の大乱」を収めた宗教指導者牟弥呼もその死後には再度の国家分裂を許し、中国の殷王朝も人間的統治の周王朝、政治的統治の秦王朝へと道を譲らざるをえなかった。古代に成立したこうした宗教依存型の統治はこのように歴史上長くは続かなかったのである。

が、こうした3種の学説を比較検討する時、これらの経過が示唆するのは「国家」が真に「政治権力」として安定するための条件であって、それはやはり第1や第2の説が主張する社会生活的な条件であったのではないと思われる。つまり、Young & Fowler [2000] が「エコロジカルな説明」として一括する第1、第2の説明のあり方はインディアンが未だ生産力的に自然を支配していなかった段階における「生産力的な説明」であって、たとえば中国の古代王朝のように治水をなす生産力のなかったことが王権と文明の不安定化の原因であったのだと理解される。鉄を持たないという条件下で治山治水をやり遂げることの困難性に思い至る必要があるのではないかと考えるのである。Young & Fowler [2000] も313-314ページで言及しているが、宗教的な色彩を色濃く持つ首長制の正当性は世界の不確実性を静めることにあるのであって、これをマルクス主義的に表現すると「生産力の不足故の自然力への拝跪」となる¹²⁾。つ

12) 大西 [1992] 70ページで示した「原始共産制」の理解はそれであった。ただし、ここでは邪馬台国が「原始共産制」に分類されている。しかし邪馬台国は不安定ながらも「国家」であって、

まり、生産力的な限界が権力の宗教性を帰結したのであってその逆ではない。この意味でも、第1、第2の説明がより根源的であるというのが筆者の理解である。

VI まとめと課題

こうして見ると、日本のマルクス主義者が長らく無関心でいたアメリカ・インディアン研究には多くの示唆的な内容が含まれており、我々も今一度まじめに『起源』を読み直し、またインディアン研究への関心を高める必要に迫られる。そのことを確認しつつ、本稿の範囲で明らかとなったこと、および今後の課題を簡単に箇条書きしておきたい。

- ① エンゲルスの理解と異なり、北米東部にもインディアン国家が存在したこと
- ② ウッドランド期のインディアンには、「野蛮」ないし「未開」の特徴と「文明」の特徴が存在する。この意味で、モルガン＝エンゲルスの時代分類は整理・変更が必要であること
- ③ 農業と並ぶ漁業の生産力的な意義を再評価すること
- ④ 国家と階級の発生にとっての農業（一部地域では漁業）の決定的な役割とその安定的持続にとって必要な鉄や灌漑・排水などの生産技術の重要性
- ⑤ 「宗教的統治」も不安定な農業社会における特殊な統治様式と一般化しうること
- ⑥ 先史時代インディアン社会とアジア史との接点の多いこと。たとえば、狭義の「奴隷」の不存在ないし少数存在の下での階級社会の可能性。ひとつの共同体が他の共同体を支配するという形式の搾取社会の「奴隷制」としての再定義の可能性。これらは「アジア的生産様式」の再定義の課題をなす¹³⁾。

ゝて「原始共産制」と言うことはできない。この意味で大西〔1992〕の分類は不十分なものであった。

13) ここで言う「ひとつの共同体が他の共同体を支配するという形式の搾取社会」はマルクス『資本論』が「貢納制」と名付けたものである。これを中村〔1977〕は「農耕共同体」間のそれとノ

このうち、②と⑥は今後の課題を含む。筆者自身の課題としたい。

参考文献

- Barnett, J. [1998] *The Natchez Indians*, Mississippi Department of Archives and History, Natchez.
- Coe, M., Snow, D. and Benson, E. [1986] *Atlas of Ancient America*, Facts On File, Inc., New York and Oxford.
- Dalan, D. A. and A. L. Ollendorf [1991] *Report of the SIUE-Cahokia Mounds Field School in Geoarchaeology*, Office of Contract Archaeology, Southern Illinois University at Edwardsville.
- Engels, F. [1884] *Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats: im Anschluss an Lewis H. Morgans Forschungen*, (村井康男・村田陽一訳, 大月書店, 国民文庫版, 1954年)。
- Lopinot, N. H. and W. I. Woods [1993] "Wood Overexploitation and the Collapse of Cahokia" in *Foraging and Farming in the Eastern Woodlands*, ed. by C. M. Scarry, University of Florida Press, Gainesville.
- Maxwell, J. A. [1978] *America's Fascinating Indian Heritage*, The Reader's Digest Association, Pleasantville and Montreal.
- Morgan, L. H. [1877] *Ancient Society*, Macmillan, London. (青山道夫訳『古代社会』岩波文庫, (上巻) 1958年, (下巻) 1961年)。
- 森 浩一 [1983] 「稲と鉄の渡来をめぐって」(森浩一他『日本民族文化体系3 稲と鉄 さまざまな土権の基盤』小学館)。
- 中村 哲 [1977] 『奴隷制・農奴制の理論』東京大学出版会。
- 大西 広 [1992] 『資本主義以前の「社会主義」と資本主義後の社会主義』大月書店。
- [2001a] 「中国少数民族問題への経済学的接近——マルクス主義と民族問題」『政経研究』第75号。
- [2001b] 「日本型企業システムの変容と転換」(碓井敏正・大西広編『ポスト戦後体制への政治経済学』大月書店)。
- Pauketat, T. R. and T. E. Emerson [1997] "Introduction: Domination and Ideology

、氏族共同体間のそれに分類し、前者を「国家的奴隷制」=アジア的生産様式とするものの、後者は原始共産制の一形態と理解している。しかし、この中村の理解は部族間の貢納制を持ったイロクォイ族やアステカ同盟体を国家成立前の形態とする理解にもとづいており、インディアンも国家や階級を持ったとする本稿の立場と対立する。エンゲルス=モルガン説の再検討が重要となる理由のひとつはここにある。

- in the Mississippian World" in *Cahokia: Domination and Ideology in the Mississippian World*, eds. by T. R. Pauketat and T. F. Emerson, University of Nebraska Press, Lincoln and London.
- Pauketat, T. R. and N. H. Lopinot [1997] "Cahokian Population Dynamics" in *Cahokia: Domination and Ideology in the Mississippian World*, eds. by T. R. Pauketat and T. F. Emerson, University of Nebraska Press, Lincoln and London.
- Snow, D. [1976] *The Archaeology of North America*, The Viking Press, New York.
- Swanton, J. R. [1998] *Indian Tribes of The Lower Mississippi Valley and Adjacent Coast of The Gulf of Mexico*, Dover Publications, Mineola and New York.
- Thomas, D. H. [2000] *Exploring Native North America*, Oxford University Press, Boston and New York.
- Waldman, C. [2000] *Atlas of the North American Indian*, revised version, Facts On File, Inc., New York and Oxford.
- Young, B. W. and M. L. Fowler [2000] *Cahokia: The Great Native American Metropolis*, University of Illinois Press, Urbana and Chicago.